

【今回の1冊】 阿部彩 (2008)**『子どもの貧困：日本の不公平を考える』(岩波新書)****●第1章 貧困世帯に育つということ****1-1 なぜ貧困であることは問題なのか**

学力、子育て環境、健康、虐待、非行、疎外感、

1-2 貧困の連鎖

子ども期の貧困、いつまでたっても不利、世代間の連鎖、職業、学歴、

1-3 貧困世帯で育つということ

子どもへの投資、良い親論(モデル論、ストレス論)、がんばってもしかたない、親の所得

1-4 政策課題としての子どもの貧困

基本的な成長に関わる医療、衣食住、義務教育、子どもの権利、

●第2章 子どもの貧困を測る**2-1 子どもの貧困の定義**

公式な貧困線の不在、絶対的貧困、相対的貧困、想定の子どもの産物、

2-2 日本の子どもの貧困率は高いのか

7人に1人、

2-3 貧困なのはどのような子どもか

ひとり親か、ふたり親か、母子世帯、子どもの年齢と貧困率、親の年齢と子どもの貧困、男性(父親)の所得、

●第3章 だれのための政策か**3-1 国際的に粗末な日本の政策の現状**

- ・子どもの状況は、家族政策だけでなく、社会保障、教育政策など、家族政策以外の政策に影響される部分が多い
- ・日本は、これまで低い失業率を保っており、子どもの貧困を政策課題としてこなかった
- ・現在の日本において、子どもの貧困に対処しているのは、生活保護制度や、雇用政策、医療費扶助政策などであり、家族政策ではない。
- ・家族政策とは、少子化対策や次世代育成計画などである。

家族関連の社会支出の面、教育支出の面

3-2 子ども対策のメニュー

- ・児童手当…給付額、対象年齢、少子化の影響
- ・児童扶養手当…母子世帯に対する制度、母子世帯に育つ子ども、少子化対策の影響、就労支援
- ・保育所…公立保育所、民間保育所、幼稚園との違い、利用保護者の年間所得、エンゼルプラン、保育所の経営
- ・教育に対する支援…金銭的支援(奨学金など)、就学援助制度
生活保護制度…セーフティネット、適用基準の厳しさ、子どもの貧困に対する限定的

な役割

3-3 子どもの貧困率の逆転現象

- ・子ども関連の給付がほとんど拡充されておらず、低レベルにとどまっている
- ・社会保障の「負担」の分配
 - 税金、社会保険、制度の構造、累進的、逆進的、所得格差
- ・子どもの貧困率の逆転現象
 - 子どもがいる貧困世帯の負担、所得再配分、現在の生活レベル、
- ・負担と給付のバランス

3-4 「逆機能」の解消に向けて

子どもをもつ世帯、政府のあり方、防貧機能、逆機能、

●第4章 追いつめられる母子世帯の子ども

4-1 母子世帯の経済状況

- ・17人に1人は母子世帯に育っている
- ・母子世帯というイメージ、
- ・貧困率はOECD諸国の上から2番目
 - 日本の母子世帯の状況の異常さ、就労率、ワーキング・プア、
- ・母子世帯の平均所得
- ・非正規化の波
 - 就労条件、職の掛け持ち
- ・不安定な養育費
 - 父親の義務、養育費の取り決め、元夫の経済状況、

4-2 母子世帯における子どもの育ち

- ・平日に母と過ごす時間は平均46分
 - 育児時間の短さ、国や自治体の対応の限界、
- ・みじめな思いはさせたくない
- ・学費以外の費用、
- ・母子世帯特有の子育ての困難さ
 - 周囲の偏見、手厚いケアの必要性、障がい、引きこもり、不登校

4-3 母子世帯に対する公的支援

- ・「母子世帯対策」のメニュー
 - 死別した場合…遺族年金、死亡保険
 - 離婚、未婚の場合…まとまった給付なし（利用可能制度 P129）
- ・生活保護制度、福祉依存ではない
- ・2002年の母子政策改革（児童扶養手当）
 - 母親の自立、テーパリング制、給付要件の厳しさ、有期化
- ・5年という時間
 - 時間が経てば生活基盤は整うのではないかという考え、福祉依存批判、欧米との政策の違い

4-4 「母子世帯対象」ではなく「子ども対策」を

- ・母子世帯に対する政策は、その世帯に育つ子どもの健全な育成を第一の目的にすべき

- ・長時間労働しても、賃金は上がらない=母子世帯の所得の低さ
- ・政策の有効性
- ・子ども対策の必要性
 - 目的：子どもの貧困の撲滅と適切なケアの確保
 - 十分な所得保障、機会の平等、ワーク・ライフ・バランス
 - *子どものケアや両立支援の観点の重要性
- ・女性の貧困

●第5章 学歴社会と子どもの貧困

5-1 学歴社会のなかで

- ・学歴は社会階層と同じような役割を果たしている
- ・すべての子どもが教授すべき最低限の教育とは何か。
- ・中卒・高校中退という「学歴」
 - 低学歴という不利、女性の学歴と貧困の関係、やり直しが困難な社会、つながり

5-2 「意識の格差」

- 努力の格差
- 意欲の格差
- 希望の格差
 - 業績主義の前提の崩壊、希望の二極化

5-3 義務教育再考

- ・給食費・保育量の滞納問題
 - 教育費の私的負担、惨めさ、義務教育の理念
- ・基礎学力を買う時代
 - 底辺の子どもたちの学力、
- ・教育を受けさせてやれない親、理由
- ・教育の最低ラインとは

5-4 「最低限保障されるべき教育」の実現のために

ヘッド・スタート、保育所の活用、就学前からの不利、貧困の防波堤

●第6章 子どもにとっての「必需品」を考える

6-1 すべての子どもに与えられるべきもの

- ・「相対的剥奪」による生活水準の測定
 - 相対的剥奪、社会に相応の生活レベル、福祉国家の発展
- ・子どもの必需品に対する社会的支持の弱さ
- ・日本ではなぜ子どもの必需品への支持が低いのか
 - 神話(総中流神話、機会の平等神話、貧しくても幸せな家庭神話)、子ども期の生活の充足とさまざまなこととの関係について、日本人は鈍感なのではないか

6-2 子どもの剥奪状態

- ・剥奪状態にある子どもの割合
 - 三世帯世帯、二人親世帯、母子世帯
- ・親の年齢と剥奪指標

2013年11月8日(金)

第6回「人間の安全保障」読書会 於 東京大学駒場キャンパス
立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 江里口泰子 readingcircle@hsf.jp

- ・子どもの剥奪と世帯所得の関係
→所得の閾値、剥奪に陥る可能性の急増、貧困のリスク、
 - ・子どものいる世帯全体の剥奪
- *剥奪指標…現時点の所得のみならず、過去の所得や遺産なども含むトータルな資源の結果としての生活水準を測るもの
- ・高齢者世帯と有子世帯の平均剥奪指標がほぼ同じ
 - ・子どもに惨めな思いをさせたくない

6-3 貧相な貧困観

- ・子ども政策の早急な立ち上げの必要性
- ・最低限の生活を向上させようとする意識の低さ＝貧相な貧困観

第7章 「子ども対策」に向けて

7-1 子どもの幸福を政策課題に

- ・子どもの幸福度
→ウェル・ビーング、ユニセフ、イギリスの方向性
- ・子どもの貧困撲滅を公約したイギリス
→児童税額控除
- ・日本政府の認識
→公式な貧困基準がない、子どもと家族を応援する日本

7-2 子どもの貧困ゼロ社会への11のステップ

- ・CPAG (child poverty action group)、
- 1 すべての政党が子どもの貧困撲滅を政策目標として掲げること
 - 2 「貧困に配慮した製作」－すべての政策に貧困の観点を盛りこむこと
 - 3 児童手当や児童税額控除の額を、価格または所得の上昇率の高いほうに合わせて俗学すること
 - 4 大人に対する所得保障も子どもに対する所得保障と同じように増加させること
 - 5 「税額控除や各種の手当の改革」－適当な額の金銭的支援を、適当な対象者に、適当な時期にする改革を行うこと
 - 6 すべての子どもが教育の必需品（給食費、制服、活動費）への完全なアクセスがあること
 - 7 移民の人々も含め、すべての住民が平等な支援を受けられること
 - 8 「より多くの就労」ではなく、「よりよい就労」を政策とすること
 - 9 利用時において無料かつ、良質の普遍的な保育を提供すること
 - 10 貧困世帯における、不当に重い税金を軽減すること
 - 11 財源を社会全体が担うこと

<論点にしたいこと>

- ・
- ・
- ・
- ・

*キーワードをつぶさに拾ってみました。皆さんの関心のある言葉から議論が広がるようにしたいと考えています。